

## ルカによる福音書24章32節 「燃える心」

### 1A 二人の弟子が保っていたもの

1B 主への愛

2B 主への信仰

### 2A 二人の弟子が失っていたもの

1B 主への理解

2B 主への望み

3B 主への情熱

### 3A 聖書全体に書かれている受難

1B モーセ五書

2B 預言者

### 4A 親密な食卓

## 本文

ルカによる福音書 24 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びはついに、ルカの最後の章になりました。午後に一節ずつ見ていきますが、今朝は 32 節を読み、エマオの途上に向っていた弟子たちとイエス様の会話に注目してみたいと思います。「二人は話し合った。「道々お話しくださる間、私たちに聖書を説き明かして下さる間、私たちの心は内で燃えていたではないか。」

イエス様を慕っていたはずの二人ですが、いつの間にか心が離れ、落ち込んでいた時に、心が内で再び燃えてきました。私たちは、いつも心がイエス様に対して冷えて行ってしまう、という試みを受けます。以前はあれだけ、主に対して燃えていたのに、今はそれほどの情熱がない。習慣としては、クリスチャン生活を歩んでいるけれども、そこに献身であるとか、心に決めて、主に関わる物事に取り組むであるとか、そういったものから離れてしまった、ということが起こりますということです。以前は、人に言われなくとも、いや反対されても、「私はイエス様に仕えます」と言っていたのに、今は、周りの人々が励まして、何とかしないと！と叱咤されても、なかなか心が動かないということがあるかもしれません。キリストと共に歩んでいるならば、ここに出て来る二人の弟子と同じ霊的な危機を通ります。

### 1A 二人の弟子が保っていたもの

時は、主が墓に葬られてから三日目です。日曜日、もうお昼過ぎでした。既に夜明けに、女たちが墓に行って、そこが空であることを知りました。そして、驚くべき姿を見ました。甦られたイエス様です。女たちは、すぐに使徒たちのところに行って伝えましたが、「24:11 この話はたわごとのように思えた」とあります。信じなかったのです。そしてエルサレムから、離れて行った弟子たちが二

人いました。エマオという村に向っていました。11 <sup>キ</sup>離れたところにあります。そこになんと、甦られたイエス様が彼らに近づいてきます。彼らに話しかけ、何を話しているのか尋ねると、彼らの顔は暗くなりました。

### 1B 主への愛

彼らは、未だ捨てずに持っているものがありました、それは、「主イエスに対する愛」です。彼らが話し合っていたのは、イエス様がエルサレムに入って、それから十字架に付けられてしまった、という話です。彼らが落胆していても、それでもイエス様を未だ愛していることが、彼らの言葉からよく分かります。「19 イエスが「どんなことですか」と言われると、二人は答えた。「ナザレ人イエス様のことです。この方は、神と民全体の前で、行いにもことばにも力のある預言者でした。20 それなのに、私たちの祭司長たちや議員たちは、この方を死刑にするために引き渡して、十字架につけてしまいました。21 私たちは、この方こそイスラエルを解放する方だ、と望みをかけていました。」彼らがどうしようもなく、辛く、悲しい気持ちになっていますが、それは、イエス様から思いをまだ話すことができていなかったのです。彼らの思いの中では、既に死んで、いなくなった人になっていました。けれども、その愛する思いは変わっていませんでした。その思いをどこに持っていけばよいか分からないでいました。

### 2B 主への信仰

そして彼らは、これだけのことが起こってしまったけれども、それでも主ご自身への信頼も失っていませんでした。「この方は、神と民全体の前で、行いにもことばにも力のある預言者でした。」と言っています。あまりにも多くの人が、これまでつまずきました。イエス様の言葉を聞いて、弟子たちの多くが離れたという言葉も、聖書にはあります(例:ヨハネ 6:66)。けれども、あなりにも理解不能なことが起こっても、不都合なことが起こっても、それでも、この方を預言者であったとして受け入れ、信じています。

けれども、ここで彼らは既に、「・・でした」といって過去形にしている、すでに過去の人です。話が少しずれてしまいましたが、私の友人の牧者の教会で、それまで副牧者として奉仕をしていた人が他の地方に引っ越すことになりました。彼についての思い出が強く、パワーポイントで彼と奥様の写真を見せて行って、最後にお二人がばっちり載っている写真を見せたらしいのですが、「まるで追悼式のようだ」とある人がもらしました。けれども、その方は、今は、その地方の教会で牧会をしています。今も生きていて、神に用いられているのに、まるで過去の人であるかのように語ってしまう・・。慕っているからこそ、今が見えなくなってしまう。そんなことが彼らにも起こっていたのでしょ。

そしてイエス様への信仰も、神の御子キリストとしての信仰ではなく、預言者イエスとしての信仰に変わっていたのです。それもそのはず、弟子たちのイエスに対する思いは、初めから明確に、メ

シアであり、神の子であるというものではありませんでした。この方に従って行って、徐々に、この方は単なる人ではない、人以上の方だ。メシアのような方だ。そして、神の子ご自身であるという思いを強くして、それをピリポ・カイサリアで、ペテロは、思い切って信仰をもって、「あなたは生ける神の子キリストです」と告白したのです。死んでしまった今、この方がキリストではないか？という希望が失われたので、初めに抱いていた思い、つまり、偉大な預言者であったということだけを語っています。

## **2A 二人の弟子が失っていたもの**

ですから、二人の弟子は主への愛は持っていたし、主への信仰もなくならないでいました。何を失ってしまったのか？順を追って考えてみたいと思います。

### **1B 主への理解**

事の始まりは、イエス様の言葉が理解できなくなったということです。ペテロが、「9:22 あなたは神の子キリストです」と告白した後に、イエス様は、ご自分がどのような道を通られるかを、はっきりと語られました。「9:22 そして、人の子は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日目によみがえらなければならない、と語られた。」このことがあまりにも信じがたいことであり、ペテロは勢い余って、「マタ 16:22 主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」として、諫めてしまったほどなのです。

イエス様はその後、何度となく、あまりにも明らかに、ご自身が十字架に付けられ、三日目によみがえられることを語っておられました。ところが、彼らは、自分たちの中で誰が最も偉いのか？という議論をしていました。それは、彼らは、キリストが現れればその時こそ、ユダヤ人は異邦人の支配から解放され、神の国が建てられると信じていたからです。ところが、なんとエルサレムに行ったら、ローマが反逆者のために使っていた極刑である十字架に付けられ、こともあろうに自分たちのユダヤ人指導者が、そうなるように企んだのです。つまり、自分たちが期待していたこととまるで正反対のこと、いやそれ以上のことが起こってしまったのです。彼らは混乱し、落ち込み、心は暗くなっていました。私たちにも、同じようなことが起こります。イエス様を自分の救い主、主として信じ、受け入れました。ところが、ところが「私の主であれば、必ずこうしてくれるだろう。」と願っていること、期待していることと反対のことが起こります。そうすると、自分はもうやっていけないと思ってしまう。

### **2B 主への望み**

彼らは、主への愛、主への信仰は失っていませんでしたが、このようにして望み、希望を失ってしまったのです。主がガリラヤにおいて、大いなる奇跡を行われ、人々を生かす言葉を語られ、この方こそがキリストだという確信に達しました。であるならば、この方こそがエルサレムを贖い、イスラエルの民を贖ってくださると熱望していました。ところが、エルサレムにおけるこの方の死によ

って、ぺちゃんこにされてしまったのです。「24:21 私たちは、この方こそイスラエルを解放する方だ、と望みをかけていました。」と言っています。

彼らが通って来たところを思い出しましょう。イエス様に一人一人が呼ばれました。ペテロ自分の舟で、イエス様に指示に従ったら、舟が沈みそうになるぐらい、大漁でした。そこにヨハネとヤコブもいました。主は、これまで誰も癒すことのできなかった、病に苦しんでいる人々を治していかれました。悪霊につかれている人々をも追い出されました。人々の病を負い、彼らに慰めを与え、そこに神の御国の到来をお見せになりました。そして、そのおことばは、権威がありました。この方は、人間以上の方であることを確信し始めました。そして、水の上を歩かれたり、嵐を静めたり、そして主が語られた言葉を何度となく聞き、この方に永遠のいのちの言葉があると確信しました。それで、何もかも捨てて、付いてきたのです。ペテロが、「18:28 ご覧ください。私たちは自分のものを捨てて、あなたに従って来ました。」と言いましたが、それは単に威張っているのではなく、本当にそうだったのです。この方こそ、神の国の王であられるキリストだという確信です。この方がローマの頸木を砕き、エルサレムの神殿で御座に着かれ、世界の隅々までを正義と平和で治めることを期待し、心が熱くなっていたのです。

ところが、その王の王たる方が、「ユダヤ人の王」という罪状書きで無残にも十字架に付けられたのです。究極の辱めを受けられました。この方が、「キリストなら、自分自身を救ってみろ」と罵られました。イエス様に仕えていた女たちは、遠くから、その姿を見ていましたが、それが限界だったでしょう。弟子たちは、ヨハネはすぐそばにいたようですが、他の者たちはその場にもいなかったのではないのでしょうか。それほど残酷な出来事だったのです。それでも、この方は十字架から降りるというような甘い期待もしていたかもしれません。その奇跡は起こりませんでした。そのまま息を引き取られたのです。そして、そのぐちゃぐちゃにされたご遺体は、丁重に葬られ、石も転がされました。これで終わりです。主に対する望み、希望がぐちゃぐちゃにされ、ぺちゃんこにされたのです。

### 3B 主への情熱

エマオに行く二人の弟子は、エルサレムから離れているその姿は、まるで彼らのイエス様から離れて行く心を表しているかのようです。彼らに失われてしまったのは、情熱です、主に対する熱い心が希望を失ったことによって、奪い取られてしまいました。私たちにも、このようなことはないでしょうか？自分がこれだと信じていたものが、まるで正反対のことが起こり、混乱し、もう熱く信じていくのはよしておこう、確かに主は愛しているが、熱くなっていると必ず裏切られてしまう。それで、心がどこかしら、遠く離れているような状態になるかもしれません。

このように心がイエス様から距離が取られていると、どうなってしまうのでしょうか？非常に奇妙なことが起こります。生きているイエス様が、二人に近づかれて、「何を語り合っているのですか？」と尋ねられると、「エルサレムに滞在していながら、近ごろそこで起こったことを、あなただけがご

存じないのですか。」と驚き、イエス様が、「どんなことですか。」と言われると、「ナザレ人イエス様のことです。」と答えているのです。イエス様がすぐそばにおられるのに、「目がさえぎられていて、イエスであることが分からなかった。」のです。イエスについて語っているのに、肝心の生きたイエス様のことに気づいていないのです。私たちも、イエス様について語っているのに、心が実は冷えていて、生きているイエス様が見えない…なんてこと起こらないでしょうか？

### **3A 聖書全体に書かれている受難**

そこで、イエス様が何とかして、彼らの心に火を付けさせるために、語り始められます。25 節からです、「25 そこでイエスは彼らに言われた。「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。26 キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったのではありませんか。27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」イエス様は愛をもって叱責されました。愚かな人たち、心が鈍いと。そして、情熱をもって、預言者たちの語ったすべてのことを語り始められました。

ここで大事なのは、「すべてを信じられない」というところです。彼らはキリストについての預言を信じていたのです。けれども、すべてを信じていませんでした。キリストが必ずそのような苦しみを受けて、それから栄光にはいるはずではなかったか、とイエス様は言われていますが、預言者たちは、確かにキリストが苦しみを受けることを語っていました。ところが、そのことについてユダヤ人の間で語られることはありませんでした。そのことが預言者はたくさん語っていたのにもかかわらず、彼らは信じていなかったのです。

### **1B モーセ五書**

そしてなんと、イエス様は、「モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」とあります。これは、かなり長い説き明かしだったのでないか？と思います。モーセから始めたということですが、つまりは、モーセ五書、創世記から始めたということです。アダムが罪を犯して、主はすでに、女の子孫が蛇の子孫に対して、「創世 3:15 彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」と語られていました。彼のかかをとを打つというのは、まさに十字架です。そして、神はアダムとエバに、「3:21 皮の衣」を与えました。そこには、家畜の犠牲があります。屠られて、血が流されて、その罪の贖いがある、人の犯した罪からくる恥を覆ったのです。この時に既に、罪は人の努力によってではなく、血の流される犠牲によってであることが示されていました。

そして、アブラハムが主に呼ばれて、イサクが約束の子であると宣言され、ところが彼を全焼のいけにえとして捧げなさいと命じられるのです。「22:2 あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて」と言われました。そこがモリヤの山であり、神殿が後に建てられるところであり、そ

ここで数多くのいけにえの血が流されることとなります。そしてその神殿から歩いてさほどないところで、ゴルゴダの丘で、神に愛されている独り子が木の上で犠牲になりました。

そして約四百年後に、モーセが呼ばれて、イスラエルの民をエジプトから連れ出すように命じられます。十の災いがエジプトに降り、最後の災いは、エジプトの長子が皆死ぬことでした。ところが、イスラエル人の家には、子羊を屠って、その血を家の門柱と鴨居につけなさいと命じられます。バプテスマのヨハネは、イエス様のことを「見よ、世の罪を取り除く、神の子羊」と呼びました。そう、子羊の流された血によって、イスラエルの民が神の裁きを免れたのと同じように、キリストの流された血によって、その血を信じる者には神の御怒りが過ぎ越すのです。

主は、モーセによって示された数々の律法を示されたに違いありません。シナイ山に上らせて、そこで示されたのは幕屋を造りなさいということでした。契約の箱と宥めの蓋、そこには大祭司がイスラエルの罪の贖いのために血をふりかけます。そして、幕には、緋色の燃糸も使われ、それは血の色です。そして、外にはには祭壇があり、そこに数々のいけにえを捧げるように命じられます。祭司たちが、イスラエル人の携えるいけにえを幕屋の入口で屠り、血を流し、それを祭壇に注ぎます。祭司たち自身、任命を受ける時に、いけにえの血を、右の耳、右手の親指、右足の親指につけます。血が流されなければ、罪の赦しはなく、血が流されなければ、神の臨在に近づけない、天に入れないことを予め示していました。

## 2B 預言者

そして、ヨシュア記から歴代誌までが歴史書ですが、その後に預言書がありますね。イザヤは、壮大な神の救いのご計画の啓示が与えられましたが、その中心人物はキリストです。7章には、「7:14 主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」と預言しました。インマヌエルとは、神が共におられるという意味であり、人であり、神であられる方です。そして、この子は 9 章によると、その子は、「9:6 主権がその肩にあり、その名は、『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。」とあります。

そして、イザヤ 40 章以降には、「主のしもべ」と呼ばれる方が登場して、その方が苦しみを受けられることが詳細に描かれています。その頂点は、53 章です。イエス様が十字架につけられる前の夜に、弟子たちにも分かち合われた箇所です。「53:4-6 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだ。しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、【主】は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。」

そして、後でイエス様は詩篇も言及されたことが書かれています。詩篇 22 篇は、まさに十字架での苦しみを克明に預言したものになっています。1 節には、「わが神わが神どうして私をお見捨てになったのですか。」とあり、十字架上のイエス様の身体の状態まで語られています。「詩 22:14-18 水のように私は注ぎ出され骨はみな外れました。心はろうのように私のうちで溶けました。私の力は土器のかけらのように乾ききり舌は上あごに貼り付いています。死のちりの上にあなたは私を置かれます。犬どもが私を取り囲み悪者どもの群れが私を取り巻いて私の手足にかみついたからです。私は自分の骨をみな数えることができます。彼らは目を凝らし私を見えています。彼らは私の衣服を分け合い私の衣をくじ引きにします。」

預言書に戻れば、ダニエル書には、明確に、「メシアは絶たれる」と書かれており、その時期までが特定されています。エルサレムを再建せよという命令が出てから七週また六十二週があり、「9:26 油注がれた者は絶たれ、彼には何も残らない。」ゼカリヤ書にも、神がご自身の仲間である羊飼いを打てとの命令があります。「13:7 剣よ、目覚めよ。わたしの羊飼いに向かい、わたしの仲間に向かえ——万軍の【主】のことば——。羊飼いを打て。すると、羊の群れは散らされて行き、わたしは、この手を小さい者たちに向ける。」イエス様が、情熱をもって、このようにしてモーセやすべての預言者から始めて、聖書全体にご自分について書いてあることを説き明かされたのです。

#### **4A 親密な食卓**

そうこうしているうちに、日が暮れそうになっていました。エマオに到着したのですが、イエス様はさらに先を行きそうな様子でした。それで彼らのほうから、「24:29 一緒にお泊りください。」と強くお願いします。彼らの中に何かが起こっていたのです。そしてイエス様と食卓について、イエス様がパンを裂かれていた時に、「ああ、イエス様だ！」だとして目が開かれたのです。ところが、その時に、イエス様の姿が見えなくなりました。イエス様と食事をする時に、そのしぐさからでしょうか、イエス様の特徴を彼らはよく知っています、それで目が開かれたのです。彼らは、聖書が開かれて、それで、聖書の言葉によって心も開かれて、それで見えるはずのものがついに見えたのです。

そして、聖書の言葉を聞いている時に、彼らの心が内で燃えていたことに気づきました。そうです、イエス様は敗北したのではなく、またイスラエルの贖いに失敗したのではなく、いや、痛みを受けて、甦り、そして栄光に入るという、神のご計画通りのことが起こっていたことに気づいたのです。自分はもう望みはないと思っていたところが、実は希望に満ちた展開になっていることに気づいたのです。そして、そこに生きた主がおられることを知ったのです。パウロは、エペソの人々のために祈りました。「エペ 1:17-19 どうか、私たちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか、また、神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができるよう。」